1971年度

駿台史学会大会

シンポジウム「村落と共同体」

研究発表要旨

駿台史学会

1971年12月4日

於 大学院南講堂

堀　越　正　行

日本の考古学界でも今「共同体（態）」の問題は研究者の間で重要な関心となっている。戦後和島誠一氏をはじめとする研究の流れがあり，最近では発掘規模の拡大化に伴って，集落址の調査結果などを具体的な資料として研究されつつある。しかし総じて考古学研究者の間での共同体の理解は，極めて曖昧であり不統一といわざるを得ない。ここではまず考古学における共同体研究の問題点を指摘し，その上で，今共同体を問題とすれば考古学ではどんな方法で問題にアプローチできるか，若干の考古学的事象の実例をまじえながら，縄文時代における所謂共同体問題について私見を述べたいと思う。なお私の専攻上，対象として扱う時代は縄文時代に主点がおかれることを予め御諒承願いたい。

Memo

福　田　和　憲

日本の古代村落史は，条理跡の復原をこころみる歴史地理学的方法と，古代社会の本質とその構造を究明する中で，村落共同体の歴史的過程を明らかにしようとする文献学的方法とによってなされてきている。しかし，軍国主義下の戦前においては“人民の立場に立つ”史観は発達しえず，両者の有機的結合も必ずしも充分には行なわれえなかった。従って，古代村落史の本格的な研究は戦後まで待たれねばならぬが，その一大転期をもたらす契機となったのがマルクス『資本制生産に先行する諸形態』の紹介であり，ここに古代村落史は，『諸形態』に示されるアジア的生産様式論をめぐって展開され，古代社会における村落共同体発展過程の位置づけ，および古代村落におけるアジア的特質の解明を課題とすることとなる。もちろん，その主流は戦前の村落共同体論を継承批判する立場からであるが，右からしても，古代村落史とは古代共同体の日本的特質の解明であったといえる。

ところで，今回のシンポジウムの素材である木村礎著『日本村落史のこころみ』は，日本村落史を「勤労農民の生活の場を具体的に調査，復原し，そこに働らいていた勤労農民の立場を基軸として歴史的事象を考察していくことを志す歴史研究」と定義づけ，民衆史的観点から体系的な日本村落史の構築をこころみようとするものである。そして，その基本的作業として村落の景観復原を重視する。こうした視角による村落史研究はすでに古代においても，「村落史の課題は村落共同体の歴史を研鑽することである」（石母田正）という言葉に現われているが，木村論考はそれを“人民の立場に立って”体系的に構築しようとした所に大きな意義をもち，まさに現代歴史学の課題にこたえんとしたものといえる。

しかし，ひとたび木村論考を古代史の立場からみた場合，論考それ自体においても若干の不備を感ぜざるをえない。それは，雄大な構想であればあるほど，多くの問題を含むという点においてしごく当然であるかもしれぬが，以下，若干の論点を述べておく。

(1)　景観復原において耕地・住居地の地理的変化・規模を述べるが，これはすでに解明されつつあるものであるが，一貫した理論性はどうか。

(2)　勧農・家族・農耕技術・開発の問題を同時に進める必要がある。

(3)　景観の復原と共同体・権力の問題の有機的結合をどう具体的にさすのか。

(4)　古代における村落景観の復原は部分的であり，全体的な評価は下せない。

(5)　それぞれの時代区分における問題意識からの村落史でなく，共通のそれに立脚した解明が必要であるが，一体それは何か。

(6)　景観復原を中心にすえるかぎり，より多くの地域的・時代的事例が必要ではないか。

高　島　緑　雄

1.　村落史・共同体論の現代的視点

　　現代農村の変貌と共同体機能

2.　木村論文の中世村落論

　　景観論

　　構造

　　歴史的位置づけ

3.　中世村落の領主的把握（若干の事例）

　　中世前期　　庄園領主・在地領主の郡郷庄支配

　　中世後期　　在地小領主の村落支配

4.　近世村落への展望

Memo

煎　本　増　夫

1. 木村論文（近世村落関係）の紹介

Ⅰ．近世の村落景観

単婚小家族＝「小さな家」＝小農＝近世本百姓を主体とした村落。新田村に典型。
近世初期の数十年間に形成（寛文～元禄　）→現代の村落景観の始期でもある。

Ⅱ．近世村落の政治史上の位置

①　「牙のない村落」

「私（木村氏）は近世本百姓の中に，古代以来の勤労農民が，ついに『小経営者』にまで自らを成長させた姿を見出す。しかし……長い戦国期を通して，村落は政治的な牙を奪い取られ，それを奪い取られた形で，近世村落は形成された（61頁）」。

②　石高制→村落の「政治の牙」を抜く。

Ⅲ．そのアジア的性格

近世村落の上に構築される幕藩体制社会「所有の欠如」・「専制的国家権力」→再生産

2. 若干の問題点の提示

(1)　近世村落の確立時点をどのようにとらえるか。（木村氏は寛文～元禄・１７世紀中～１８世紀　とする）

――将軍権力および藩権力の確立＝領国制成立＝小農支配の体制内編成（五人組）などからみて寛永期が妥当。木村氏のいう石高制の性格との関連でも――。

(2)　近世村落の共同体的性格をどうみるか。

木村論文では具体的に展開されていない。私見では，村請制の村内での頂点である村役人＝土豪的百姓を中心とした生産的・社会的結合－兵農未分離期の共同体的遺制を重視。それと均一性をもつといわれる本百姓相互の結合体としての「組」との有機的関連。その他。

(3)　土地（耕地）所有，近世農民の階層性について。

(4)　「牙のない村落」について

近世農民の階級闘争の場としての近世村落を，単に「牙」がないとすることに疑問。近世農民の斗争の拠点は，近世村落を成立せしめている小共同体＝組にある点に注意。五人組＝組は幕権力の下部機関としての面と，村役人をふくめた幕藩権力に抵抗する面があること。

(5)　近世村落の解体過程の展望